FD NEWSLETTER

CONTENTS

- 自らを見直すためのe-Learning
  総合情報センター所長・仏教学部教授　石井　公成
- ＦＤ研修会
  - ◆経営学部　日野　健太
  - ◆グローバル・メディア・スタディーズ学部　吉田　尚史
  - ◆総合教育研究部　岩崎　皇
- 公開授業
  - ◆仏教学部　松田　陽志
  - ◆文学部　長尾　譲治
  - ◆経済学部　舘　健太郎
  - ◆経済学部　小西　宏美
  - ◆法学部　中田　英幸
  - ◆経営学部　兼村　栄哲
  - ◆経営学部　藤原　篤志
  - ◆医療健康科学部　近藤　啓介
  - ◆総合教育研究部　小沢　誠
  - ◆総合教育研究部　塩旗伸一郎
  - ◆総合教育研究部　上野　勝広
  - ◆総合教育研究部　大石　武士
- ＦＤ推進委員会の今後の活動予定

自らを見直すための e-Learning

総合情報センター所長
仏教学部教授　石　井　公　成

e-Learning について議論するとなると、技術的な話題や「いかにわかりやすいコンテンツを用意するか」といった点に話が集中しがちである。後者については、教員は教える内容を熟知しており、後はそれをいかにわかりやすく伝えるかだ、ということが前提になっているのだろう。

しかし、我が身をふりかえってみると、教える内容を完全に把握しているとはとうてい思われない。筆者が専門とする仏教文献は、著者や成立年代・成立事情が不明なものが多いうえ、難解きわまりない漢文・古文・梵文などで書かれているため、その読解はきわめて困難であって迷うことが多い。また、学界の最新の諸説も正しいとは限らず、実際、主流とされる説は時代とともに変化している。となれば、少なくとも筆者に関しては、不確かな素材を、不確かな把握に基づいて教えていることになる。

ただ、学問においては、そうした状況の方が普通なのではないだろうか。文献や学説を尊重しつつも鵜呑みにせずに慎重に検討し、自分自身の読解や解釈が間違っている可能性を意識しながら考えていくことこそが、学問の正道であるように思われるのである。その意味では、わかりやすさを目指しつつ e-Learning の教材を準備するということは、自らの実力や先入観、そしてこれまでの教え方を見直す作業にほかならないことになろう。

筆者は、インド学仏教学論文データベース（INBUDS）と漢文仏教文献の一大集成である大正新脩大蔵経の電子テキスト（SAT）のインターネット公開に長らく関わってきた。近い将来、これらを活用して仏教漢文独習システムの作成に取り組んでみたいと考えている。その場合、語法の基本は繰り返し練習して身につけてもらうほかないが、解釈の段階に進んだら、「これが唯一の正解です」という形にせず、「この文章は、どのような立場から読むとどのように受け止められるか」、「わかりにくいのは、どれかの漢字か語順が間違っているためではないか」、「この文章を読んで違和感を感じるのは、その文献と自分の価値観のどこが違っているためなのか」といった点について、大いに迷うようなシステムを模索してみたい。おそらくは、コンテンツを作成する筆者の方も迷いに迷いを重ねることになるだろう。

ＦＤ研修会

教育方法の改善を通じて学生の学力向上に資するために、例年、秋にＦＤ研修会を開催して来たが、今年度は出来るだけ駒澤大学固有の教育条件を考慮し、それにふさわしい有意義な試みを実施する目標を設定した。昨年度までは、外部の講師を招いて、ＦＤを巡る種々の問題点を指摘していただき、参加者が自身の教育に役立てるという方法を採用して来たが、どちらかといえば、身近な問題として受け止めるという刺激に欠けていたといえるであろう。こうした限界を克服するため、今年度は駒澤大学で現に実施されつつある教育方法の一つである e-Learning （YeStudy）を取り挙げ、総合情報センターの協力を仰いで、その概要の説明と既に採用されている先生方の体験を披露していただくという方法を採用した。詳細は以下のとおりである。

１．日　時：10 月 29 日（月）午後 4 時 20 分～
２．場　所：1-405 教場
３．テーマ：普段着のｅ-Learning
４．司会：安元　稔　ＦＤ推進委員会小委員会委員長
　挨拶：石井　公成 総合情報センター所長
　Moodle（YeStudy）の説明：
　　三浦　謙一氏 総合情報センター
５．事例報告：
　○「自分の言葉で考えるための e-Learning」
　　日野　健太 経営学部准教授
　○「駒澤大学 GMS 学部における授業支援システムの構築と運用」
　　吉田　尚史 グローバル・メディア・スタディーズ学部講師
　○「手さぐりの e-Learning」
　　岩崎　　皇 総合教育研究部准教授
６．質疑応答および意見交換
７．参加対象者：全教職員

石井公成　総合情報センター所長

「自分の言葉で考えるための e-Learning」

経営学部准教授　日野　健太

駆け出しの教員の私ですが、そもそも大学教員の仕事は個人商店の職人芸だと思います。何で今日の講義で学生たちはわからん、という顔をしていたんだろうか、と自問自答して、ほかの誰かがうまくやっている、と思えば芸を盗みにいくのが、教員稼業です。最後は自分自身の研究者・教育者としての知識と能力と良心にすべてがかかっているところが、この仕事の醍醐味なのだ、と思えるようになってきました。

その前提に立って考えると、YeStudy は職人芸の新しい〈道具〉です。岩崎先生、吉田先生をはじめとして、それぞれの先生の「自分ならどう使うか。」を、見せていただいて、よいところを盗ませていただければうれしい、そう思いました。

IT さえ使えば教育は改善する、とか、ネットでアンケートをとればうまくいくとか、駒澤大学の e-Learning やＦＤが、そっちのほうに行きませんように・・・。

「ＦＤ研修会 GMS 授業支援システムの事例報告」

グローバル・メディア・スタディーズ学部講師
吉田　尚史

本稿では、ＦＤ研修会におけるグローバル・メディア・スタディーズ(GMS)学部の授業支援システムに関する事例報告について述べ、今後の展開について議論する。

2007 年 10 月 29 日に行われたＦＤ研修会において、GMS 授業支援システム(Moodle)に関する事例報告を行った。事例報告では、「駒澤大学 GMS 学部における授業支援システムの構築と運用」という題目ですでに学会発表をしているので、その内容に加え、2007 年度前期の成績確定を終えた後の経験を加えて、授業支援システム(Moodle)の事例を報告した。

主な報告内容は、ほぼすべての専門科目が IT 利用(Moodle による GMS 授業支援システム)をしていること、運用状況、

学生の利用状況、考察・課題である。詳細については、次の文献[1][2]においてすでに発表している。

また、実際の授業支援システム上の授業の資料や、学部全体で行っている次年度の演習科目(ゼミ)の学生の登録など、デモンストレーションを行った。また、オムニバス授業において授業支援システムを使う上での利点と問題点、教務のシステムなどとの連携の重要性、入学試験の成績からの追跡調査の必要性などについて議論した。

質疑応答では、有意義な議論をすることができた。Moodleのような既存のソフトウェアを利用する場合、大学の制度や慣習に合わせてソフトウェアを微調整をすることの重要性など、具体的な議論ができた。

例えば、教員が採点した点数を即座に学生が参照できる機能(Moodleが持っている機能)について、駒澤大学には成績調査の制度があり、それと相反している。すなわち、ある授業がMoodleの課題提出や採点の機能を深く利用している場合、その授業の最終的な成績に近い点数を、学生は教務部から受け取る前に参照できてしまう問題が発生する。やはり同様の報告は複数あり、Moodle上でそれをどのように変えていくべきか、具体的な議論ができた。解決策として、小テストなどの課題の採点結果などは学生に即座に公開し、最終的な成績に直接関連するような採点結果はMoodle上に表示しないなどの変更が考えられる。

今後の展開として、これら研修会の議論を踏まえて考えると、既存のソフトウェアを大学の教育や研究に導入する方法、ＦＤ本来の目的である教育の改善における授業支援のためのシステムの活用方法、駒澤大学のe-Learningのあるべき姿など、など、様々な課題・展開が考えられる。

今後も、このような研修会が、各教職員の目的意識向上と、ひいては教育全体のさらなる改善に貢献することを期待している。

[1]松原大悟、吉田尚史、苗村憲司、斎藤信男："駒澤大学GMS学部における授業支援システムの構築と運用,"（駒澤大学グローバル・メディア・スタディーズ学部）日本情報教育開発協議会(JADIE)第3回全国大会,北海道大学，2007.

[2]苗村憲司，斎藤信男，吉田尚史，松原大悟:"教育・研究資料のデジタルアーカイブ化と著作権に関する研究," Journal of Global Media Studies (駒澤大学グローバル・メディア・スタディーズ学部紀要)，pp.31-46，2007.

「YeStudyを使ってみました」

総合教育研究部准教授　岩崎　　皇

インターネットを使って、自宅から授業の資料を見ることができるとは、何と便利なことだろう。もちろん、授業は対面が基本ですから、欠席や資料の紛失という特別な事情に備えてということになるのかもしれません。

また、授業中に使った映像や音声で自宅でも復習ができるとしたら、外国語の勉強にはもってこいです。

ひところの授業を撮影してコンテンツにというのと違って、身近で、地に足が着いた感じがしました。もともとパソコンに触ることには抵抗がなかったので、物は試しという気持ちで使ってみました。

今回は資料等をアップロードして利用できるようにするという使い方をしただけですが、むしろ問題はどのような資料をアップロードするかにあり、この方面の工夫が大事だと感じました。

学生が授業以外にも練習でき、たとえ授業を休んだとしても自分でそれを補えるような環境を作っていかなければ、語学教育の成果はおぼつかないように思います。そして、Moodleはそのために大変役に立つ道具だと思いました。

参観の教職員

公開授業

研修会と並んで、ＦＤ活動の重要な柱であり、例年秋に実施している「公開授業」を、今年度は各学部等のＦＤ推進部会を中心に組織していただいた。教員・職員の自由参加を通じて、常日頃気付かなかった優れた教育方法を体験し、模範となる教育方法を身近に感じて、各自の講義に役立てるというのが「公開授業」の趣旨である。今年度は、合計 13 科目を対象にそれぞれの先生方独自の方法で講義を進めていただいた。科目の性格、時限、必修・選択の別等、一概には論じられないが、次のような問題点があるように思われる。

まず、参加者の数が少なく、折角「公開授業」をお願いしても、切磋琢磨の材料となりにくいという点である。同時間帯に複数の科目を「公開授業」とせざるを得なかったという状況を今後は出来るだけ改善する必要があるであろう。また、少人数クラスと大人数講義、必修科目と選択科目、1 時限目と午後の講義など、可能な限り、性格の異なる授業を組み合わせて取り上げ、出来るだけ多数の参加者を仰いで、それぞれの特徴にふさわしい授業方法を見聞する機会を提供する必要があるであろう。

平成 19 年度　公　開　授　業　一　覧

担当教員名	科目名（配当学科）	日時・時限・教場	授　業　内　容
仏教学部教授 石井　清純 仏教学部講師 松田　陽志	坐禅 （禅仏 3・4 選）	11 月 22 日(木) １時限 禅研－坐禅堂	坐禅の実習。坐禅堂内の「単」と呼ばれる畳の上において坐禅を行います。最初の 40 分間は、ひたすら坐ります(祇管打坐)。約 10 分間の経行(きんひん)という緩やかな歩行を挟んで、後半は『坐禅用心記』の講読を行います。基本的に裸足で行います。
文学部准教授 長尾　譲治	社会保障論 （社 1・2・3・4 選）	11 月 27 日（火） 5 時限 9-392	社会保障制度のしくみについて、漫画のキャラクターなど、イメージしやすい実例に当てはめながら、授業を展開しています。また、「就職したら」「結婚・妊娠・出産したら」「もし今、障害を負ったら」というような、学生がこれからの人生で直面するさまざまなライフサイクルごとの社会保障の現状と課題について、自分自身の問題として考えてもらえるように心がけています。
経済学部准教授 舘　健太郎	産業組織論 b （後期　経 2・3・4 選）	11 月 15 日（木） 4 時限 1-303	講義形式：通常の講義形式 オークションの概要について紹介する。まずその種類と性質について述べ、次に結果を予想するためのモデル分析を行う。最後に、最近注目されているダブルオークションや組合せオークションについても簡単にふれたい。
経済学部講師 小西　宏美	グローバル・ファイナンス （経 A 2・3・4 選）	11 月 20 日（火） 1 時限 9-177	講義形式：Power Point を使用 多国籍企業の貿易、投資活動を支えるグローバル・ファイナンスの役割について学習します。
法学部講師 中田　英幸	債権総論 （法 A 2 選必）	11 月 27 日（火） 1 時限 9-391	債権者または債務者が複数存在する債権債務関係に関する法制度を、債権者と債務者との関係(外部関係)、複数当事者の一人に発生した事由の他の当事者への効果(影響関係)、複数当事者間の関係(内部関係)に分けて解説する。

経営学部教授 兼村　栄哲	マーケティング論 （営Ａ２・３・４選）	11月29日（木） 4時限　　1-401	小売業者が採用するさまざまな形態（営業形態、経営形態、態、形態）について概説する。
経営学部准教授 藤原　篤志	生産管理論 （営Ａ２・３・４選）	11月20日（火） 1時限 1-404	本科目は経営学部の専門科目であり、製造企業における生産管理、生産システム、生産上の諸問題について講義を行っている。公開授業当日はトヨタ自動車で生まれたトヨタ生産システムの講義を予定している。授業のスタイルはオーソドックスなもので、板書とその解説を中心にしている。これに加えて講義内容に関連する新聞記事を紹介・補足説明することにより、講義内容の一層の理解につながるよう努めている。
医療健康科学部 准教授 近藤　啓介	医療統計学 （後期　放３選）	11月21日（水） 3時限 4-203	医療健康科学部では、統計による研究データの解析が必要であり、この講義では医療特有の問題に触れながら統計の手法を学びます。今回は統計学の検定を中心に、実際に学生に測定計算させながら、検定の仕組みを理解してもらいます。
ＧＭＳ学部講師 吉田　尚史	インターネットとメディア （後期　GM1選必）	11月20日(火) 1時限 1-201	この授業は、インターネットの原理・要素技術・それらの応用・PCを用いた実習などについて講義・実習を行う科目である。この時間は第10回目にあたり、インターネット上のメディア応用サービスについて、アクティブ情報システムを例に挙げ講義・実習を行う。
総合教育研究部 准教授 自然科学部門 小沢　誠	数学（微分積分） （全学科（放・フレB除く）選）	11月21日（水） 2時限 9-407	三角関数・対数関数・指数関数の n 次導関数及びそれらに 0 を代入した値を求めさせる。次に、マクローリン展開を解説し、三角関数・対数関数・指数関数のマクローリン展開を求めさせる。最後に、虚数を解説し、オイラーの公式を導く。
総合教育研究部 准教授 外国語第二部門 塩旗　伸一郎	中国語ＩB （国１・地文１・環境１・社１・福１・心１）	11月24日（土） 2時限 9-170	中国語の場合、日本語や欧米語では意味の最小単位として働く「詞」＝単語の世界を、さらに小さな単位である「字」の世界が下支えする。ユニットを憶える方がその組み合わせよりも数が少なくて済むし応用もきく。 今年度の授業では、166の必須字を指定し、説明や練習の随所に盛り込むことで、中国語の意味世界の二層構造に気づかせ、基礎力を強化することを目指した。奏功すれば、中国語の応用力や、漢語理解の深化による日本語力の向上にもつながることが期待される
総合教育研究部 教授 外国語第二部門 上野　勝広	スペイン語ＩA （営Ａ 1）	11月27日（火） 3時限 9-287	自ら編集したテキストに基づく初級のスペイン語クラス。 テーマは活用にやや難しい部分を含む命令形である。 文法説明に続き、実用的なミニ会話のモデルを聞いて内容を把握する。 また歌詞や映画の一部を活用し、命令表現の具体的な提示も行う。随時、理解の確認と応用の練習問題にも取り組む。

総合教育研究部 教授 スポーツ・健康科学部門 大石　武士	健康・スポーツ実習 （太極拳） （政１選）	11 月 21 日（水） 1 時限 玉川校舎－体育館	太極拳は、中国古来の武術であるが、硬拳のように筋骨を鍛錬するものではなく、腰を軸に手足のバランスを取り、呼吸法にのっとって、一定の早さを保ち、ゆっくりとした柔軟な動作が要求される。このしなやかな動作は日本の能の所作に似ており、繰り返し稽古することによって内面の気、優美さ、心の静けさを養うことができる。

「坐禅の授業について」

仏教学部講師　松田　陽志

仏教学部の学生にとって坐禅は必修の実習科目です。私が担当しているのは再履修の坐禅Ｉと選択科目である坐禅Ⅱとの併修科目です。通常の授業では同じ科目名でも担当する教員が替われば、その授業内容や方法は大きく変わるのが普通です。しかし坐禅の授業は、曹洞宗の威儀作法に則り、沢木興道老師以来、駒澤大学の坐禅作法として長年に渉って行われてきたもので、その授業内容、すなわち坐禅の作法と指導方法は教員が替わっても変わることがありません。

坐禅の授業は、通例二人の教員で具体的な坐禅の指導にあたっています。学生は約４０分程度の坐禅を２回行い、その中間に経行（単より降り静かに堂内を歩く坐禅）を約１０分行います。２回目の坐禅中には提唱（講義）があります。

また学生は１回に二名ずつ交替で直堂という役割をつとめます。直堂は警策を持ち、また鐘を鳴らして坐禅の授業を進行する側になります。その作法を修得するために直堂に充てられた学生は、授業のかなり前に来て坐禅堂の準備や作法の練習を行い、教員もその指導にあたります。

学生は坐禅の作法を習得し、朝早くから９０分の間、黙々と坐禅を行ずることを求められます。通常の授業とは全く違い、静かな空間の中で極力言葉を発さずに行う教員の指導は、学生に少なからぬ緊張と圧力を与えていると思います。その張り詰めた雰囲気を敬遠してか、どうしても集中できずにいたり、坐禅堂に来なくなる学生もいます。

しかし、坐禅の授業に関する限り、問題は授業の内容や指導方法の如何にあるのではないと思います。試験やリポートがなく、純粋に坐禅堂内で坐禅したか否かという出席のみで評価する坐禅の授業においては、単純に朝早くから坐禅堂に来て坐禅するという、前向きの姿勢を持たせることができるかということが問題です。

坐禅の担当を何年も続けてきての経験ではなく、具体的なアイデアも思い浮かびませんが、授業に対する前向きな姿勢は何か特別な指導やアイデアよりも、教員が一人一人の学生とどのような関わりをもつかということと対応するのではないかと思います。

通常の坐禅の授業では学生と言葉をかわすことは余りありません。しかし、直堂に充てられ、授業前にその作法を指導すると教員と学生個人との関係ができます。直堂は教員である私と共に、他の学生の坐禅をしている後ろを静かに巡ります。直堂の役割を終えた後の学生の出席率は、比較的良いような気がします。学生個人と教員との関わりができ、また他の人の坐っている姿を後ろでみることにより、独善的に授業に来なくなるようなことは少なくなるのではないかと思います。

「見学して下さった先生方と学生の感想から」

文学部准教授　長尾　醒治

11 月 27 日（火）5 限に、文学部の公開授業として、「社会保障論」を他の教職員の方々に見て頂きました。見学して下さった方々は、ＦＤ担当の職員の方も含め、5 名。昨年も同じ授業を公開していたので、慣れもあったのか、さほど緊張もせず、ふだん通りの授業をご覧頂くことができたと思います。

この授業では毎回、学生たちがよく知っているテレビ漫画

やドラマの主人公に登場してもらい、「漫画に出てくる○○さんがケガをしたら」「△△さんが新たに妊娠・出産したら」「□□夫婦が熟年離婚したら」などという、学生がこれからのライフサイクルで遭遇する可能性のある場面での社会保障（年金、医療、介護その他）について、主としてＱ＆Ａ方式で解説・考察する方法を取っています。また毎回、独自に印刷している出席カードを使用して、授業の評価と感想・質問・意見などを書いてもらい、次の回で「質問への回答プリント」を配布して、すべての質問等に答えるよう努力をしています。学生たちも授業に積極的に参加してくれ、質問・感想欄にもたくさん書いてくれるので、全質問への回答は大変ですが、授業準備と講義の時間は私の楽しみの１つとなっています。オリジナル出席カードに書かれた公開授業当日の感想を一部紹介すると・・・。

○当日の講義内容：結婚・離婚や妊娠・出産・育児に関する社会保障

○参加して下さった教職員の感想：「私語に対する注意もあり、静か。居眠り・内職をする学生もいたが、大人数の割には充実している」「着席の配置の割には私語も少なく集中しているほう」「メール・内職等もかなりあるが、この大教場では仕方ない」「Ｑ＆Ａの場面で、学生個人にアイコンタクトを向けてもよいのでは？」

○学生の感想：「公開授業で他の先生もいて、ちょっとキンチョーした」「質問への回答プリントを読んで、身近なことも勉強することができ、とてもためになっています」「出産費用の現実にびっくり。ということは、私が生まれた時も・・・。自分の身体を大切にしなければと思った（笑）」「先生は毎週、このＴＶ漫画をチェックしているのですか（笑）」「私の家も児童扶養手当を受けていたけど、こんなに助かっていたんだー！っと思った」「離婚後に再婚しても年金分割されることに驚いた。だんだん女性に優しい社会になりつつあると思った」「このプリント、おばあちゃんになるまで取っておこうと強く思いました」

「公開授業を終えて」

経済学部准教授　舘　健太郎

11 月 15 日に「産業組織論 b」で公開授業を行い、教職員の方々にお聞きいただきました。今回は公共事業の発注や青果市場の取引などで使われているオークションについて説明しました。

普段話している中で、良い講義とはどういうものだろうと時折考えることがありますが、なかなかこれという答えは見つからず、結局手探り状態でやってきました。その中でささやかながら心がけるようになってきたことは、同じ内容を説明するときでも、聞いている人の興味や学習度に応じて話す分量や話題などを合わせるようにしようということです。というのも、誰しも自分の興味と違っていたり、話が簡単すぎたり難しすぎたりすると「つまらない」と思ってしまうものだからです。

そうは言っても、これを実践するのはとても難しいと感じています。公開講義では心がけが少しでも活かされていたかどうかが気になるところです。準備がとかく自転車操業になってしまっていたこともあり、今回は丁寧で分かりやすい授業ができているかを再確認する上でとても貴重な機会をいただいたと思います。また、学生も良い意味での緊張感の中で授業を受けることができたようです。どうもありがとうございました。

「公開授業を終えて」

経済学部講師　小西　宏美

今年度から駒澤大学経済学部に着任しました小西宏美です。着任早々に経済学部ＦＤ推進部会委員をお願いしますと言われて、そのときは気軽に引き受けましたが、今回公開授業の対象ということで少々戸惑ったことを白状しなくてはなりません。私の講義担当科目は「グローバル・ファイナンス」で、主に多国籍企業の貿易や投資を支える金融システム

について講義しています。今年は初年度ということもあり授業は常に手探りの状態です。毎回の講義を終えるたびに準備したレジュメの稚拙さ、講義内容の未熟さに思い悩む日々です。そんな状態でしたから公開授業と言われて戸惑わないはずがありません。

当日は多少緊張しながら教場へと向かいました。学生には事前に何も知らせていなかったので出席者は通常どおりという印象でした。授業を開始して 10 分ほどたったところで事務担当と思しき方が数名入って来られ何枚か写真を撮影し・・・　なんとそれで終了してしまいました！公開授業ということでＦＤ委員や経済学部の先生方が何名くらい来られるか、と考えていましたが、結局どなたもお見えになりませんでした。私が教場を見渡した範囲では、ということですが。こうして公開授業は無事（？）終了したわけですが、参加者ゼロということで多少心残りであったことも確かです。

こうした経験を踏まえた上で、今後の公開授業のあり方について僭越ながら私見を述べてみたいと思います。公開授業の目的は、①教員が日々緊張感を持ちながら講義の質を高めていく、②他の教員の講義を参考にする、といった点にあると思いますが、今回は①の目的を達するに止まりました。もちろんそれだけでも十分に意味があると思いますが、②の点についても考えると、今後モデル講義－学生アンケートなどで高い評価を得た講義をモデル講義という形で公開する－の導入も一案ではないでしょうか。今年度の経済学部の公開授業は私のものも含めて２コマありましたが、そのうちの１コマをモデル講義とし他の１コマはこれまで通りの公開授業とすることで①、②の目的を達することができるのではないでしょうか。ＦＤ推進委員会で検討していただければ幸いです。

「公開授業の制度化について」

法学部講師　中田　英幸

まずは、法学部の公開授業にきてくださった方々にお礼を申し上げる。不適切な説明や教壇の上に立っていては分からないことを指摘していただき、大変参考になった。

私自身にとって有益であったが、大学全体にとってみると有益かどうか、公開授業の目的に鑑みると若干疑問がある。そもそもの目的は他学部の授業を見て授業改善のヒントを得ることにあるけれども、その趣旨は実施において貫徹されているわけではない。「異なる教員による工夫に富んだ授業」というのであれば、実施要件として少なくとも中堅以上の先生によるとするのが適切であろうが、担当者を見る限り必ずしもそうなっていない。ベテランの方から講義担当者が指摘を受け、公開授業をした者の授業を改善するという側面もあるように見える。また、他学部の講義を聴講するとき、年間講義の最後の時期では講義内容を理解するのが難しいことが多いのではないか。講義は各回独立ではなく積み重ねである。内容が理解できるほうが得るヒントも多くなるとすれば、実施時期の調整も必要である。

目的がどちらにあるにせよ、ＦＤ公開授業の結果が共有されにくい点にも問題がある。私の認識違いかもしれないが、他学部の講義を見て授業改善のヒントを得たという方が、そのヒントを全学部に知らしめる制度になっていない。アンケートの指摘は別の学部にとっても有益でありうるので、まとめた上で全体に周知さる方が望ましい。また、不適切・不十分な点を指摘するという目的の場合でも、情報の共有は有益である。その情報が提供されることで、公開授業を担当しない教員の講義改善につながる。

公開授業を行った教員・公開授業に出席した方以外の利益のためには、より目的に沿った公開授業の制度化・公開授業から得た情報の共有が望ましい。

「大人数教育の難しさ」

経営学部教授　兼村　栄哲

本学に赴任してから、早 10 年が過ぎようとしている。この間、フレックスＡについては、多少の増減はあるものの、毎年ほぼ 400～500 名の学生が私の「マーケティング論」を履修してきた。学生一人ひとりにとって少しでも有意義な授業となるよう、自分なりに努力は続けているものの、はたして受講生の目から見て、私の授業はどのように映っているのであろうか。以下、自省の念も込めて、これまで「マーケティング論」をどのように進めてきたのか、振り返ってみよう。

１．静粛な授業環境の維持

残念ながら、受講生の私語等が一切なく、静粛な授業環境が保たれたなかで 90 分間授業を進めることができたことは一度もない。学生が私語をするたびにその都度、当事者に対して注意をしてきたことにより、その数は少なくなってきたものの、依然として毎時間数回は注意をしているのが実情である。私語をする学生が悪いのか？それとも私語をせざるを得ないほどつまらない授業をしている私が悪いのか？

２．出席調査

履修者が出席しているか否か、一年間を通じて毎時間調査したことは一度もない。なぜなら、何百人も受講生がいると、出席調査票を配布するだけで相当の時間を要するし、出席調査がおこなわれるという理由だけで、真剣に授業を聞く気のない学生も出席すると予想されるからである。現在は、一年間を通じて、5 回ほど抜き打ちの形で出席調査をおこなっている。しかしながら、本来、所定の授業時間の 3 分の 2 以上出席をした履修者のみが定期試験を受験する資格があるはずなのに、はたしてこれで良いのであろうか？

３．板書とレジュメのバランス

赴任当初は、レジュメを配布することなく、授業内容を板書する形式で授業を進めていた。しかしながら、この形式では、板書した内容をノートに書き写すことに専心し、授業内容そのものの理解を疎かにする受講生が少なくなかった。

そこで、板書を極力控え、授業内容を詳細に示したレジュメを配布することによって、この問題に対処しようとした。しかしながら、こうした形式においても、新たな問題が発生することになる。授業内容を詳細に示したレジュメを配布したために、履修者は「出席しなくても、このレジュメを所持しているから、試験は大丈夫！」という気になり、出席率が低下したのである。

そのため、数年前から、授業内容のうち、履修者に最低限理解してもらいたい内容のみを示したレジュメを配布し、レジュメに示さなかった内容については板書で補足するという形式で授業を進めている。この形式で授業を進めることが最善であるか否か、判断するにはもう少し時間が必要であろう。

４．授業内容

周知のとおり、受講生の基礎学力は年々低下している。そのため、少しずつではあるが、一年間を通じて、授業内容の量を減らし、質を落としているのが実情である。社会が大学に要求する学力のレベルは、年々高まっているにもかかわらず、はたしてこれで良いのであろうか？少人数教育であれば、補講をするなどして、ある程度受講生の学力と社会が要求する学力のギャップを埋めることが可能であるのだが、大人数教育では・・・。

「公開授業の日程・時間の設定について」

経営学部准教授　藤原　篤志

この度私は初めて公開授業を担当し、通常の授業の一部を観ていただいた。公開授業の趣旨は、他の教員の授業に接し、「その体験によるさまざまな発見を通して、今後の授業改善のためのヒントを得ること」とされている。しかしながら、今回は公開の主体としての参加なので、趣旨に直接関連する事ではなく、公開授業の実施、特に公開授業の日程・時間の設定について書かせていただきたい。

今年度の公開授業は各学部等が主催する形での開催であったので、人選や日程・時間の設定も各学部等に全面的に委ねられた。このことは、ＦＤは大学全体の組織的活動であると同時に、教育を直接担う各学部等による、現場レベルからの草の根的な活動であるという意味から、評価できる推進方法であったと思われる。しかしながら、各学部等から公開授業が出揃い一覧表が出来上がってみると、一部の日程・時間の設定上の問題が明らかになった。すなわち、同じ日時に開催される公開授業の重複の問題である。実は私の公開授業の時間に、他にも２つの授業が公開となっていたのである。公開されている授業の数は少なく、年に一度の貴重な機会なので、できるだけこのような事態は今後避けるべきであろう。各学部等に人選や基本的な日程・時間の設定を委ねた上で、最終的には重複のないよう日程・時間の調整を行い、できるだけ参加の機会を拡大し、ＦＤ活動を効果的に推進すべきであると考える。

「「夢を与える」授業がしたい」

医療健康科学部准教授　近藤　啓介

大学のＦＤの困難な点に、まったく同じ授業がほとんどないことです。つまり他の授業で工夫された手法がそのままでは、自分の授業には活用できないことです。私も様々な手法を自分の授業に合わせて試行錯誤しながらより良い授業ができるように工夫しています。公開授業は今年で 2 年目となる医療統計学です。今回の授業では、約 2 万個の 2 色の BB 弾の割合を実際に計測しながら統計的に推定をさせました。既に計測した結果を記載した資料を配布して統計学的な計算だけをさせても良いのですが、参加型の授業のほうが学生のやる気も高まりますし、計算の仕方も記憶に残りやすいと思っています。また、昨年との違いは計測用容器の大きさを 3 種類用意して人（班）によって統計量にばらつきが出るようにして、机上の計算だけでは得られない問題点を考えさせることが出来るように工夫しています。

私なりに授業の工夫をしていますが、教育手法がすべてではないと思います。立命館大学安齋教授は、私の尊敬する師の一人です。安齋教授の授業・講演は、ご存知の方も多いと思いますが工夫された手法がいくつも使われています。そのため、その手法に注目されてしまいますが、最も重要な部分は話術にあると思います。話の間（ま）や展開のタイミングがすごいのです。難しい科学の話をわかりやすく語りかけ、退屈しそうになる前に、関連するエピソードが入り、どうしても聞き入ってしまうのです。この話術を会得しようと頑張っていますが、まだまだゴールは見えません。

では、話術や手法があれば、良い授業とは何なのでしょうか。私が思うに、単に教科書を読むのではなく、学生に語るほうが良いであろう。そして、具体例などを示しながら諭す（理解させる）と更に良い。一番良いのは、「夢を与える」ことではないだろうか。つまり授業からその専門的な分野に興味を持ち「学ぼう・調べよう」という気持ちを持たせることが重要なのではないかと思っています。専門的知識は教科書や参考書があれば覚えることが出来ますが、その気が無ければ意味が無く、単なる試験のための丸暗記になってしまいます。私と同じようなことを 19 世紀のイギリスの哲学者、ウイリアム・アーサー・ワードが述べています。

“The mediocre teacher tells。 The good teacher explains。 The superior teacher demonstrates。 The great teacher inspires。”

私は、何人の学生に夢を与えられたのだろうか？　少しでも多くの学生に夢が与えられるように今回の公開授業が役に立てばと思います。

「数学を非理系学生に伝えるために」

総合教育研究部准教授　小沢　　誠

１１月２１日（水）２時限９－４０７教場で、選択科目の数学（微分積分）の公開授業を行いました。授業内容は大きく分けて３点で、ｎ次導関数、マクローリン展開、オイラーの公式です。それぞれ３０分程度で進める予定でしたが、少し無理があり、ｎ次導関数が終わった時点でかなり時間が押してしまいました。そこで、マクローリン展開を説明した後、直ぐにプリント（三角関数、指数関数、対数関数のマクローリン展開とそのグラフ）を配布しました。マクローリン展開

を実際に計算して確かめる時間はありませんでしたが、多項式の次数が上がるに連れてグラフの接する部分が広くなっていく様子がプリントにより一目瞭然で、マクローリン展開を直観的に理解してもらえたようです。

授業後の意見交換会では、４名の先生方にご意見をいただき、大変有意義な公開授業となりました。頂いたご意見の中で特に、１．目的意識をはっきりさせること、２．自習できるようにすること、3．プロジェクターを使用すること、4．小テストを行うことの４点が大変参考になりました。

１については、例えば、マクローリン展開を解説するときに、先ず初めにマクローリン展開の公式を述べておき、その後で説明を与えるという流れの方が学生にとって分かり易いのではないかということです。また、マクローリン展開が何の役に立つのか、どのような応用があるのかを紹介すれば、より学生の興味を引くことができると思います。どちらかというと数学者は数学以外への応用についてあまり関心がなく、純粋に数学の理論だけを解説しがちですが、数学を非理系学生に伝えるためには目的や応用を明示することが極めて大切であることが分かりました。

２については、数学では一回でも休んでしまうと授業について行くのが大変になってしまうので、テキストやプリントなどで自習できるようにしておくと良いということです。

３については、板書をする必要がないもの、板書では量が多過ぎてしまうもの、パソコンのグラフィックを利用した方が良いものなどについては、プロジェクターを利用した方が良いということです。

４については、授業中に演習をさせてはいるが、解こうという気が起こらない学生や、どこから手を付けて良いか分からない学生が見られるので、小テストを行うことで、解く気を出してもらったり、どこまで理解しているのかを確認すると良いということです。

「メリットだらけの公開授業　2」

総合教育研究部准教授　塩旗　伸一郎

公開授業への参加は昨年に続き 2 回目である。前回の感想は『FD NEWSLETTER』第 9 号に「見る側も見られる側もメリットだらけ」と記したとおりである。今年は、なるべく他の人にもそれを味わってもらうべきだが、再度私が出ても他の教員の邪魔になるわけでなし、希望者は歓迎とのことだったので、続けて参加させてもらった。

公開となれば、それなりにプレッシャーもある。でも却ってそれが励みにもなる。学生にとっても同じことらしい。参観に見えた方には今回も、教壇からは見えない角度から、自分では気づかぬ問題点の指摘やアドバイスをいただいた。他の先生の公開授業も大いに勉強になった。「メリットだらけ」たる所以である。いただいたアンケートの中には、他言語の教育実践に裏打ちされた高度な観察眼からの批判や提言が含まれており、事後の意見交換会と併せ、日ごろ多くはない多元的な言語教育論を交わす貴重な機会となった。

他学部の先生には、当該学部生がどのような外国語授業を受けているのか、126 人教場に 50 人という環境を含め、垣間見てもらう機会にもなったと思う。外国語の勉強が専攻と直接結びつくケースは稀なので、授業では学習の動機づけが常に重要となる。それを知的興味に訴えることで持続させるのが理想だが、実際には雰囲気を盛り上げて「参加する」姿勢を喚起する必要が年を追って増している。ふだん、難しいことをいかに解りやすく講ずるかに腐心しておられる学部の先生方には、まるでチイチイパッパのように見えたかもしれない。しかし、授業が有効に働くための基礎は学生との「信頼関係」（アンケートより）を築くことにあるという点は、どんな科目にも通じるものだろう。我われも同じ苦労と悩みを抱えていることに多少とも共感を覚えてもらえたなら幸いである。ともあれ、そんな「他者の眼」を意識する契機を持てたこともまた、公開授業の効用ではあろう。学部教員の参観は極く少なかったが。

ＦＤで最も大事なことは自発性である。やらなきゃまずいからと受け入れたり、導入後は義務的にこなしているだけでは何の意味もない。私が見せていただいた授業でも参加者は少なかったが、ポスター1 枚作るだけでも効果は違うはずである。工夫の余地はまだまだあると思う。

私自身は、参観者が多くないことは苦にならない。頂戴し

たアンケートの回答は、多寡にかかわらず一枚一枚が宝ものである。これからも、公開授業が自発という原則で運営されていく限り、機会があればまた参加したいと思っている。

「公開授業の反省と収穫」

総合教育研究部教授　上野　勝広

この度は多忙な公務の合間をぬって、何人もの先生方、また職員の方々が私の至らない公開授業（スペイン語ＩA）にわざわざ参観して貴重なコメントをくださいましたことを深く感謝申し上げます。視聴覚メディアを含む補助教材の活用や学習内容に関連するスペイン文化紹介などにお褒めの言葉、また板書の仕方や学生に課する練習方法に有難いご指摘をいただきました。

今年度より総合教育研究部のＦＤ推進委員会委員を務めている関係上、役回りで授業公開せざるをえないだろうと心構えはしていたのですが、実際に私の担当が決定するとかなりプレッシャーを覚えました。プロである以上、公開して恥ずかしくない授業を普段からしていなくてはいけません。だからいつも通りの自然体で構わないわけです。とはいえ非常勤講師時代を含め 20 年ほど大学でスペイン語教師をしてきていても、自らの現場が学生でない人様の目にさらされるのは初めてです。不安と緊張、そして心理的な負担を抱えつつ、まるでイベント運営のような進行表を作成し、当日の授業に臨みました。

自著のテキストを用い、活用にやや難しい部分を含む命令形がテーマです。まず文法事項の説明をします。続いて実用的なミニ会話のモデルを聞いて内容を把握した後、学生にも対話文をしてもらいます。このテキストに加えて、スペイン語に翻訳されたマンガのプリント、歌詞の聴き取り、バルの紹介、スペイン映画の中の用例提示など多様な内容を盛り込んでゆきます。それらに時間を取りすぎて、終盤に予定していたテキストの練習問題がこなせない結果になりました。公開を意識した過剰な＜仕込み＞が通常の進行を妨げてしまい、大いに反省しています。

同じ部で昨年度委員をなさっていた岩崎先生がお書きになっていますが、公開授業に「参観して得るものは確かにあり」、それを刺激に自らの授業を反省し改善を図る契機を与えてくれます。そして今回のように自分自身が公開すれば、さらに大きな収穫が得られるのだと実感しております。第三者である教職員より客観的な立場からのフィードバックという今後の授業改善のための貴重な糧を享受できるからです。

「公開授業を終えて」

総合教育研究部教授　大石　武士

初めての公開授業で私自身とても緊張しましたが、学生はいつもと変わらずのびのびとやっていたと思っています。

また、参加された先生と職員の方も一緒に太極拳に参加したことが、学生にとっては初めてのことであり、いい体験になったと思います。なぜなら、いつもよりもさらに楽しく体を動かしていたように思うからです。

実技では他の先生と一緒に体を動かすことはないことから、今後は健康・スポーツ実習の公開授業にはできるだけ多くの学部の先生方に参加していただき、学生とともに汗をながすことが、先生と親密さを感じるのではないかと今日の授業を通して強く思いました。
そのことが、学生にとっては最高の思い出になるのではないでしょうか。

ＦＤ推進委員会の今後の活動予定

○平成 19 年度第 2 回　ＦＤ推進委員会開催
平成 20 年 1 月 28 日（月）

※　ＦＤ活動についてご意見がありましたら、各学部等の小委員会委員までお申し出ください。

編集後記

今回の「FD NEWSLETTER」は、１０月に行われた「ＦＤ研修会」と１１月の「公開授業」の記事です。１１月の忙しいなか、原稿を寄せて頂いた先生方に、厚くお礼申し上げます。

年一回開催されてきた「ＦＤ研修会」は、今年で４回目を迎えました。今までは他大学からの講演者でしたが、今年は本学の 4 人の講師による研修会でした。今や、IT を活用した授業運営の工夫は避けられない時勢になってきました。絶えず世界に目を向けて、教室内の IT を活用して、瞬時に、学生も教師も国境を越え、リアルタイムで授業が展開されることが望ましい。その意味でも今回の「ＦＤ研修会」は、大変役に立つものでした。

「公開授業」は、１４名の先生方にお願いしました。毎年、学生が変わります。教え方も変えていかないと、逆に、教員が学生について行けなくなります。何か新しい工夫を採り入れた授業運営は欠かせません。教員にとって、板書の仕方、教材の選択、IT 機器の活用、話し方など、どれひとつを取っても大変参考になり、今までと違った自分“ Something New in Life ”を発見することに気づきました。

今年は、坐禅、健康・スポーツ実習の授業が加わり、教室では見られない新たなＦＤ活動の展開も見えてきましたが、本学の教育の質的向上を図るための一助として、出来るだけ多くの教員の参加が望まれます。

これまでのＦＤ推進委員会の活動は、主に、「学生による授業アンケート」、「FD NEWSLETTER」、「ＦＤ研修会」、「公開授業」による大学の教育活動でしたが、今、大学の研究活動にも向い始めています。しかし今後とも「ＦＤ研修会」、「公開授業」は毎年実施していく必要があると思われます。

（高野秀夫、下谷内勝利）

【タイトル横の写真は、禅文化歴史博物館】

ＦＤ NEWSLETTER Dec.2007 第 13 号
発行日：2007 年 12 月 20 日
発行者：駒澤大学ＦＤ推進委員会
〒154-8525 東京都世田谷区駒沢 1-23-1
TEL 03-3418-9125　Fax 03-3418-9114
（事務局：教務部）